



朝夷巡島記第七編

五



127A
35

村田



朝夷巡島記全傳第七編卷之五

東都

松亭金水編輯

續輯第九

奸計彌齟語盤城酷吏
天誅直臻隱毒報

是災妖の善政の勝を夢怪の善行の勝をとりぬ。是天地の定理なり。然
 ともども時として。その愛もまた無に能わぬ。朝夷の忠直も。や一点の
 過ぎぬ。浮雲天日と覆ふも。一霎時々の明と暗まんとせあり。再説當
 下阿武隈大夫の時直が。その果て候て。一坐の人と祝ひく。呵々として
 ろち笑ひ。傳えきく朝夷大人の器量骨柄衆の勝を。受氣運ましく忠
 勇仁愛の人なりと世のいひ。這回始めて見えし。とせあり。いふも人の噂ふ
 差りて。天晴るる武士なりと。心ふ感し漫小恐る。思ひし。しもの一件の

其素脱て今あて。明地小緯と言ふより。深く憎むを重罪なる。矢藤五
 妹といひ。且もさくさく覚えぬなき。空言をふらち交て。罪をひらひん心ふ。開
 い大人も似合し。ぬ比怯の挙動傍痛し。今日檢断のその場あて。知縣
 と始ぬ農丈們と。集會て仁義の道と説き。言下小諸人と服させし。實小
 凡人の及むぬ所。う得い大人と称ふる間も。婦人と侮言と誣て。その身
 の罪と通れんと。計救ふふいと稼し。こまの仁義の大道あて。さやうのその何
 どの巻何まの篇ふんさるる故事を。博識強記の朝夷大人が。奇説の聽
 願りけれ。猶こまかても双びるは。明智の人といえんぬ。孰う明智でたれ
 ののゆん。飽まを嘲ける言葉の端時直扇と半閑きて。阿武隈が口小
 おあて。あひ酔愚さう但し。物狂ひふる覺束さ。身の分際も辨へ。貴
 人へ對して。无礼の口綻其迅速不退るを。朝夷大人と。何と云ぬ。豫倉

其素脱て今あて。明地小緯と言ふより。深く憎むを重罪なる。矢藤五
 妹といひ。且もさくさく覚えぬなき。空言をふらち交て。罪をひらひん心ふ。開
 い大人も似合し。ぬ比怯の挙動傍痛し。今日檢断のその場あて。知縣
 と始ぬ農丈們と。集會て仁義の道と説き。言下小諸人と服させし。實小
 凡人の及むぬ所。う得い大人と称ふる間も。婦人と侮言と誣て。その身
 の罪と通れんと。計救ふふいと稼し。こまの仁義の大道あて。さやうのその何
 どの巻何まの篇ふんさるる故事を。博識強記の朝夷大人が。奇説の聽
 願りけれ。猶こまかても双びるは。明智の人といえんぬ。孰う明智でたれ
 ののゆん。飽まを嘲ける言葉の端時直扇と半閑きて。阿武隈が口小
 おあて。あひ酔愚さう但し。物狂ひふる覺束さ。身の分際も辨へ。貴
 人へ對して。无礼の口綻其迅速不退るを。朝夷大人と。何と云ぬ。豫倉

よりの使則君の名代るれば任意道理小扱にござる。とありとて吾も詰り
 責べきとてふあはれ凡を下りて上と學ぶ。和漢古今の通受なり。此頃後余の
 相識仁より。吾も書翰と贈り越る。その文面と宛たる。君は只管放逸ふ
 募りてひて色と愛。安達景盛と三河へ下り。その愛妾なる。雀鶴と奪ひて
 左右小侍らし。昼夜遊と真做し。今ふもわれ景盛。歸參り。うらむる
 べき。と心ある人なふ汗と握らぬ。のりじ。實は君臣の貴族なむ。ての理の
 ま。勝る所あり。既小三河の草賊と。一戦小切平らげ。日。凱陣せし
 処。妾の居ね。景盛大。その家僕とせめ。と。亂とふ世の風。如。此。と
 あり。と。景盛大。怒。と。相。思。の。君。と。も。人。倫。小。闕。る。は。奉。動。亦
 相違なき。小。於。て。の。怒。と。奉。ら。ん。と。憤。る。その由。頼。小。や。え。と。君。の。深。く。嫉
 ませり。且。近。臣。等。が。勸。め。ふ。と。景。盛。逃。討。と。べき。の。結。構。景。盛。は。と。り
 その由。て。尼。の。基。の。館。へ。參。り。只。管。愁。訴。と。し。る。尼。君。憐。ま。と。思
 さま。て。安。達。が。邸。へ。と。せ。り。使。と。り。柳。宮。へ。安。達。の。父。祖。より。旧。功。あり。
 然。ふ。何。の。罪。と。追。討。と。追。討。と。べき。結。構。と。ふ。意。と。得。と。速。小
 止。まり。の。人。備。ま。と。強。て。討。んと。す。ま。吾。と。對。て。その。後。小。計。と。人。と。嚴。る。
 尼。の。基。の。館。に。於。て。柳。宮。も。力。あり。直。小。軍。旅。と。罷。り。若。尼。の。基。の。館。に。せ。り。
 あり。此。珍。事。の。出来。べ。実。小。淺。増。き。世。間。の。具。小。怨。め。越。る。朝。夷
 刀。稱。も。その。密。臣。且。君。の。名。代。る。ま。支。多。小。做。ひ。と。人。君。と。ま。臣。と
 吾。も。も。謙。倉。殿。の。同。ト。内。小。あり。と。遠。臣。と。親。と。り。て。
 古。風。と。守。り。今。時。の。流。行。の。疎。り。今。の。大。人。道。小。闕。る。と。
 深。く。責。ま。る。行。ひ。弁。一。吾。君。と。責。ふ。似。て。善。ら。ん。これ。勸。め。と。人。の。口。と
 嚙。と。ある。と。倍。ら。ぬ。然。あ。い。あ。や。岩。瀧。羊。瀨。然。あ。い。あ。や。阿。武。隈

その由。て。尼。の。基。の。館。へ。參。り。只。管。愁。訴。と。し。る。尼。君。憐。ま。と。思
 さま。て。安。達。が。邸。へ。と。せ。り。使。と。り。柳。宮。へ。安。達。の。父。祖。より。旧。功。あり。
 然。ふ。何。の。罪。と。追。討。と。追。討。と。べき。結。構。と。ふ。意。と。得。と。速。小
 止。まり。の。人。備。ま。と。強。て。討。んと。す。ま。吾。と。對。て。その。後。小。計。と。人。と。嚴。る。
 尼。の。基。の。館。に。於。て。柳。宮。も。力。あり。直。小。軍。旅。と。罷。り。若。尼。の。基。の。館。に。せ。り。
 あり。此。珍。事。の。出来。べ。実。小。淺。増。き。世。間。の。具。小。怨。め。越。る。朝。夷
 刀。稱。も。その。密。臣。且。君。の。名。代。る。ま。支。多。小。做。ひ。と。人。君。と。ま。臣。と
 吾。も。も。謙。倉。殿。の。同。ト。内。小。あり。と。遠。臣。と。親。と。り。て。
 古。風。と。守。り。今。時。の。流。行。の。疎。り。今。の。大。人。道。小。闕。る。と。
 深。く。責。ま。る。行。ひ。弁。一。吾。君。と。責。ふ。似。て。善。ら。ん。これ。勸。め。と。人。の。口。と
 嚙。と。ある。と。倍。ら。ぬ。然。あ。い。あ。や。岩。瀧。羊。瀨。然。あ。い。あ。や。阿。武。隈

吾これとく非ひぎの族うぢに陥おとさんとして。言語げんごに絶たえする白痴ちのめどもも。汝おんぢらといふ争あそ
 ひて。吾これと陥おとさんと欲ありまるとも。吾これ既すに兩眼りやうがんありて。その面魂つらみの不良ふやうと知しる。
 既すに兩の耳みみありて。言げんご下くだふことと怒いらせしむ。その虚きよと奸けん人の計けい殺ころの意い。
 さまじく汝おんぢらとこの姪婦めいぶ。俱ともに搦なめて將いて飯いを。公向こうかう所ところに於あてその是非せいひの公裁こうさいと
 請うけん。勿論もちろんもりのみ。髮城はつきの豫よて北條きたじょうの二ふたの愛あいらう。かのこ
 受けは。是これとわて往むかひ。罪つとに陥おとさる。執権あつけんの。こを悔くし。かひらら。吾これ直道ちかみちと好この
 と。いとも。執権あつけんの君きみの外戚ぐわいせき。殊ことに往むかひ昔むかし右幕府みぎまくらふの時ときよりして大功たいこうあり。用もち方も重おも
 き其人そのひとに恥はぢと願ねがひて何なんふせん。殊ことに在下のちの君きみの昵近ぢきん人ひとと正ただまの職しやくあり。汝おんぢらの
 餘あまり。さ君きみ今いまふ。この檢断けんたんの圖ずらんと。丈さかに濟すば。その他その他。何なんと穿うち正ただ
 あり。さ智ち不ふ誇たかるの心こころありん。元来もとより吾これの性しやう急いそみ。聊いささ非道ひだうと欲ありまると。才さいに
 抱かをら。い。い。ぬ。も。忍しのび。が。て。思おもふ。ま。況まて。の。才さいと。陥おとさん。と。計けいら。う。の。

悔くま。さ。ふ。も。と。空うつらを。し。て。あ。ま。き。あ。ね。と。這こ。執権あつけんへの好意このいあり。汝おんぢらこれとく
 心こころに。一旦いつたんの才さいの誤あやまり。と懺悔ざんげ。して。こ。ま。不ふ任にん。され。昨今きのう心中こころに。狭せま。い。ぬ。念ねんも。解とけ。
 双方さうほう平安へいあんに至いたるべし。只ただま。這こ。回えんの君きみ今いまの。使つかひ。を。才さいと。願ねがひ。性しやうと。曲まげて。事ことと
 慮ある。実まことに。汝おんぢら達たちが。僥倖さうじやうあり。と。思おもふ。あ。い。似にれ。會あひ。秋あきに。御舍ごせ推おけて。今更いまさらふ。心こころの
 巧たくまし。粗語そごひ。如何いかに。せん。と。思おもふ。も。元もとに。已いに。意趣いそあり。ま。湯島たがしま密使みつしの故ゆゑ
 と。りて。廻めぐら。を。計畧けいりやくあり。け。と。無事むじに。治ちめて。飯いら。し。て。容使ようしの。詮せんも。され。の。り。う。
 後のちに。い。ら。る。崇たかま。う。へん。と。思おもふ。猶なほも。思案しあんと。疑うたがひ。て。時直ときただ左右さゆうの。肘ひぢと。法はふも。思おもふ。
 りぬ。と。才さいの。の。り。ま。こ。こ。此こ。処ところに。農民のうじんより。首あたま首くびと。請うけて。そ。ま。不ふ應おう。田園でんえんと。願ねがひ。
 ち。う。ら。と。聊覚りやうかくえ。も。あ。ま。き。と。成なれ。誰たれに。おん。才さいに。告つげ。ら。ぬ。その本人ほんじんに。聽きま。欲ほし。と。才さい。
 の。こ。ま。ま。と。好このま。が。一いち。条じょう。吾これ。と。知しる。所ところに。あ。ま。き。然しかる。一いち。旦たんの。誤あやまり。と。懺悔ざんげ。せ。よ。と。い。
 何なんの。所ところ。を。は。や。く。その。後のちに。心こころ得えが。ら。り。在ある。下した。彼令か。執権あつけんの。貝かい。肩かた。う。ら。ぬ。の。り。と。も。



あへま

とれたる



朝夷怒て磐城の

黨を鏖小む

朝夷七編巻五

今更今年五月廿五日
朝夷怒て磐城の黨を鏖小む
朝夷怒て磐城の黨を鏖小む
朝夷怒て磐城の黨を鏖小む

とれたる

罪あつて正しういふで遠慮ふ及ぶきといひて誓ひて信と祝ふ。今の如くふ
 いふれども口と喋ると物のいふぬ。朝夷刀称のいふるどらる。虚云と構えつ。
 吾身と危ふるうを。倘然らば其処へ出て。在の隨意。頼と言へ但しその
 威小畏まじや。と駿眼をまじすつくと云。今秋もあつて朝夷が傍近く小
 膝立直し。柳接ときき雜し。顔忽地秋風の雨と帯る風情ふらり。昨夜より
 のおん身が非道も盡くひひれ。今更再び何といふん然と女と侮りて。
 雪でも墨といひ消して。妾のこゝろ刀称ふまて。あつたれ計救せらんと。悪
 名負してその身の辱と覆りんとするおん身が心底黒くとも比喩ともいふ術
 ちぬ寐徒者。それでも猛者先武丈夫言其のうへ証拠いふとも。まじ老
 老毛いふらつ。佯狂して遁まんと。うらふとも遁さんや。在のまじ傾ひて。
 任る人の氣も解て。罪許さるともいふん。頼抵らる。雪上。霜と加ふる

諭ふ。如何いふと声震りて。哮をまじその景勢。絶塵多るふりくへて。
 さの怖あつてえける。朝夷礮と白眼つけ。汝とをえや老老毛いふ。女もがも
 忽地ふその非を知りて陳ぶる。実と告て死をんとする。その心底とまじ
 感して人の将死をんと。言と善と称へる。その口もまじ乾くぬ。表裡を
 以て吾と罵る。這回いふく許しがう。尾籠るせと怒小塩。巻と堅めて
 左のの小髻と。幾矢とあべ二言といふを。嗟やと叫びて其処へ倒る。これ祝て
 時直阿武隈大夫岩瀬。羊瀬一般。破發狼藉と刀おまじとけ。膝立
 直せば時直。後方と向き者共来まこと。いふより早く應と回答て。豫て儲
 け一味の諸士。閑の間。逢と隔紙と。二度おまじと蹴抜きて。むくくと朝
 夷が前後左右。小衝を鬼。去来縛めの繩かれと。ひとく詰寄る。朝
 夷信とらむ祝を。吾小何等の咎あつて。縛あるとする。奇怪至極。頃と太

らむ辛き目を見せんと。鑼小弁一声たり揚て。罵言さる小怖もやまけん。得小左右より寄属を。下時直立か。旁より猶祿を。倘惶しくい。愈ち退き。比怯るいと。勵まと言葉。まど畢らぬ小一人が。けしう傍て朝夷の右の腕と。丁と把。朝夷颯と。う拂ひ突出。ま巻小突。う膳也。得ましく倒。伏を。繞て。鬼を。膝小引敷き。まど腕と。揪る。目を見せ。控と。抛ま。並べ。折敷の上。平張伏して。大蛇。うる。浅盤の中。蠢き。うその穴。小鯉。あ。れど。生作。跡。う。ま。ま。抛。ち。居。小。頭。と。打。あ。て。そのま。作。及。り。の。も。あり。う。得。の。大。勢。一。容。小。忍。ま。て。傍。へ。傍。付。は。志。朝夷の。從。僕。等。この。物。音。と。つ。つ。けて。何。事。う。や。と。ま。あ。り。間。の。隔。紙。用。ん。と。す。る。ふ。豫。て。期。あ。う。と。な。れ。後。へ。銓。柱。緊。と。り。て。推。ど。も。曳。ど。も。動。え。ぬ。ぬ。突。の。方。へ。入。き。や。う。る。く。と。置。品。と。罵。ま。て。その。容。と。窺。ふ。の。と。再。説。經。城。時。直。い。思。ふ。小。倍。う。

朝夷が。勇力烈。あ。く。豫。て。荷。擔。人。小。と。語。ら。ひ。お。た。る。部下の。甲。乙。七。八。人。抛。除。ら。し。と。怒。り。付。さ。れ。て。適。息。あ。る。の。と。も。蠢。く。の。と。少。物。え。ひ。得。志。半。い。死。し。う。と。ど。く。な。れ。と。ま。秘。て。心。中。忽。地。小。五。分。の。怖。と。生。下。の。勅。ある。と。仕。出。して。一家の。浮。沈。の。期。小。究。ま。う。と。思。ふ。の。う。と。依。止。き。小。あ。う。ざ。れ。阿。武。隈。以下。の。の。の。ども。小。信。と。駿。眼。あ。て。の。の。の。ども。佩。る。刀。と。す。る。と。引。拔。き。朝夷。目。が。け。切。て。か。る。心。得。う。と。朝夷。も。同。く。刀。と。抜。騎。し。汝。校。者。何。等。の。故。小。辯。と。巧。と。吾。を。し。て。死。地。小。陥。ん。と。す。る。ぞ。遮。莫。う。と。も。ま。ご。個。の。猛。者。と。称。ら。う。と。ま。と。束。ね。く。と。ま。と。俟。ん。將。と。細。首。う。ち。落。し。て。修。羅。の。巷。の。導。き。せん。の。小。より。早。く。發。矢。と。斫。る。時。直。ま。と。受。流。し。反。ま。刀。小。背。力。と。し。ま。て。真。甲。未。塵。と。稱。と。太。刀。と。右。へ。ま。ら。し。朝夷。い。ま。と。ま。と。伸。て。時。直。が。左。の。膳。と。臂。刀。う。當。下。阿。武。隈。岩。割。草。漉。る。一。容。小。太。刀。ね。き。殿。羽。あ。て。朝夷。が。前。後。左。右。透。あ。せ。斫。て。か。る。と。受。亦。乃。更。小。と。も。せ。ぬ。

身と逡巡て大喝一声。仇多が耳の根貫ぬく。宛も奔雷の頭上を墮て。瓦屋も毀る。斗するれば。足も麻木。膽縮む。五骸小汗と流す。敵て又向ふ術と知る。朝夷太刀と把直しく。三打三打。髪をうごかす。阿武隈岩。割芋。漱ぎ。首の宙へを落てげ。この時。走り。死もや。手膝の傷より。滾く。とて滴る血。汝も苦む。あゝと。死す。と。計策の。あつて。悔む。の。う。此期。あつて。猶。今の。惜ま。ま。斯て。あ。朝夷。が。傾て。首と。落さ。らん。死。う。真似。とする。あ。若。と。俯。して。疼。さ。と。堪。へ。息。を。さ。如。く。不。做。し。と。朝夷。を。一。勢。力。仇。多。と。刺。由。て。四。を。と。つ。今。火。の。消。る。如。く。何。処。と。人。の。気。勢。も。は。然。る。ふ。て。も。は。僕。多。何。方。不。何。と。做。し。居。ら。ん。の。物。音。の。噪。が。き。不。出。来。ぬ。を。不。測。る。と。次。の。間。う。ま。ま。と。次。の。間。其。餘。間。毎。と。窺。ひ。つ。る。不。彼。処。不。置。と。声。せ。え。う。あ。ん。め。り。と。往。て。往。る。不。果。あ。て。隔。紙。の。後。へ。柱。と。堅。く。鎖。し。て。在。と。

つんつけ。引抜て。親。と。ち。関。け。僕。多。の。主。と。恙。ま。顔。は。大。不。ち。歡。び。向。より。さ。の。太。刀。の。音。と。餘。声。の。噪。も。さ。さ。ど。る。じ。と。思。ふ。傾。ま。ら。ん。と。存。る。不。あ。入。へ。ぎ。口。の。い。ま。鎖。と。更。不。用。と。元。来。の。家。の。案。内。と。知。わ。び。心。さ。ず。も。黙。止。つ。あ。ん。上。の。案。ト。さ。る。不。不。事。不。在。し。て。欽。と。異。口。同。音。ふ。ひ。け。れ。朝。夷。の。うち。点。頭。仔。細。あ。つ。て。ら。の。家。の。主。人。阿。城。四。郎。時。直。と。始。り。て。阿。武。隈。大。夫。と。岩。瀧。作。理。及。び。芋。田。莖。六。の。他。の。吾。の。名。と。不。知。る。校。者。不。意。ふ。と。對。ひ。る。不。因。り。或。ひ。抛。つ。け。切。伏。せ。半。生。半。死。の。者。も。あ。り。ま。死。する。由。を。さ。る。不。吾。既。不。諍。論。と。法。ゆ。ん。と。使。節。ふ。ち。か。騷。擾。不。及。と。鎌。倉。と。の。人。對。し。て。言。解。術。も。る。の。の。の。聲。の。あ。ふ。及。ま。止。事。と。得。る。う。り。これ。の。分。解。不。腹。か。き。切。ら。ん。と。覺。悟。せ。が。ま。と。熟。と。あ。ひ。く。と。吾。の。所。で。余。と。隕。さ。酒。與。不。乘。ト。假。初。の。喧。嘩。の。う。り。人。の。さ。然。ら。ん。時。の。君。令。の。重。さ。

矢と射損じて奥へ逃込む者のあり。朝夷遠き逐われて汝の居城の即ち。主と討せし當の敵と討んと観着る健の挙動。勝負を得ざるべし。傾て返せと呼ぶほど。彼者の猶面もやど。所へ逃る。朝夷四下。配。何方までも逐蒐ぬ。道なき道なき。暇小矢うち番。兵と發てども。這回心急まる。空も着て傍小飛ぶ。朝夷を顔と。城が家の郎黨とい思ひの外も湯島。汝先頃佐く。今それ。権の家臣と下小戮さふ忍び。生て通子。再生の恩と報せん。矢と射懸る執念くも。恨む心あり。その釈せん。遠く此処へ。未だ。是も深き故由あり。問れて二句の答へ。腰小佩る。引抜物ともいふ。切て蒐る。朝夷例の鉄撮棒と。把直して。四面。狭し。居り。左右。自在。這の朽惜と。捧と。扱

刀と抜き。渡り。今く。丁。五合六合。朝夷のうも。渠と生る。搦めんと。會釈。湯島。二生懸。腕疼。揮る。降。聊。猶豫。湯島。目。受。雷。大力。朝夷。太刀。支。真甲。未塵。碎。倒。朝夷。故。湯島。家。藏。夫。量。他。忍。居。不。意。點見。小。奴僕。婢。女。筒。逃散。二個。人の居。心。安。嗟。然。這回。詮。後。証。批。時。直。及。湯島。阿武。隈。會。死。遠。憾。去。未。再。外。の。方。出。秋。の。夜。海。長。け。東。雲。な。り。け。朝夷。下。僕。庖。厨。の。方。



猛八
考六
獸六
郎
不憶
危難

あハ

まろ八

あハ

へ遣へて。つんまろふ宵不仕まろ。飯もあり菜もあり火をたき消て湯茶の
みけまど。腹と肥をの要少い足りぬ。將此方へ持て来よとて。残るる運
つ。主従あめて十分。うち咲ひるどまろ。たや見と日さう昇るぬ。
時刻いよところ所と徐こま去りけり

義漢道路遭災厄

忠膽貫主僕再會

續輯第十

于粵岡田冠者遺腹の旅店の主猛八と腰越獸六郎の西名の属下の
者俱ふ十人可也。荒川縁の家とま出夜と日不嗣で急ぎまろと。其道と不
近うま思ひの外不日と重ね漸く不陸奥ま。南部の境不到ま。ま
あて人の風まと聴ふ。あ四五日前鎌倉の檢断使とて朝夷の秀とをん
り入の通らま。まろといふと。斯といふと相違ま。ま其案内の知ら

まとのとど。岩城山へ弘前より。南の方とま。彼処と乍て往んぬのと。
磐城の山と目的とて。只管道と急ぎけり

因ふり陸奥へ東山道の大国へ。往昔三十六郡。後小五十四郡
不領つ。殊小その境廣りして。王化の達ま。元月天皇和洞五
年。陸奥突越後と裂合。出羽のふと肇むといふ。出羽ふ十一郡。後小
由利の郡と加へ。今その負十二ふま。國高八十七方石餘といふ。但し
諸書と按むるふ。悉く異同あり。陸奥大管五十四郡。東西
六十日大上国。田數四万二千五十七丁。知行高百七十三万五千石。書小曰く
百九十二万石。ま百八十七万石といふ。ま執る是ま。知ま。本文磐城と
称ま。りの弘前の南の磐城山といふ。今安壽姫の古跡あり。推現ふ
崇め祀る。江戸より弘前へ百八十里。その南ふまといふ。行程のま。詳

城の山論。その檢断。朝夷大人の未とんと聽る。その檢断のこと。斯の如くの騒ぎ。及ぶや。丈夫もさ。知る。若然らん。朝夷大人の身の存亡。罹る。斯る。猶。豫。も。う。ろ。ろ。鬼。も。角。も。も。の。河。と。渡。り。て。后。次。才。と。聽。察。も。不。差。の。ぬ。と。一。臂。の。脅。力。と。助。く。べ。と。頼。ふ。一。決。を。て。岸。を。こ。し。到。り。船。や。あ。つ。と。つ。ん。と。え。折。る。件。の。人。数。も。不。通。付。て。口。に。お。り。る。や。其。処。う。る。奴。等。の。謙。倉。訛。と。お。も。さ。る。朝。夷。が。方。人。を。て。あ。り。ぬ。べ。若。然。も。わ。く。逸。ふ。擧。め。て。曳。と。知。縣。の。指。揮。其。処。動。く。と。詰。す。猛。八。獸。六。兩。個。の。り。の。い。し。も。騒。げ。る。氣。色。を。い。ろ。ふ。も。吾。朝。夷。大。人。不。由。縁。あ。り。の。る。と。彼。人。の。迹。を。逐。て。今。の。所。へ。来。り。の。い。ま。面。會。の。い。さ。ね。い。の。款。を。知。る。と。ま。何。故。彼。人。の。方。人。の。と。吾。等。と。罵。り。夫。等。の。と。と。逐。ふ。語。を。後。に。擧。め。る。と。も。知。縣。へ。曳。も。為。る。と。嗟。騒。も。農。夫。門。去。来。を。款。と。頼。り。と。詰。ま。さ。も。

口。に。お。り。る。筋。具。あ。れ。ね。ど。城。の。守。護。も。時。直。め。其。外。眼。代。阿。武。隈。大。夫。知。縣。の。岩。淵。芋。田。ま。で。采。心。斫。倒。一。夜。紛。紛。と。て。朝。夷。を。何。方。と。も。逃。去。す。然。も。い。ま。の。守。護。眼。代。も。少。於。る。が。吾。等。と。促。し。て。行。方。と。探。し。擧。め。て。出。せ。と。その。分。付。の。嚴。り。汝。等。由。縁。の。者。と。い。は。れ。その。俣。め。い。通。り。が。い。ま。面。會。の。い。さ。ね。い。と。開。て。分。解。と。さ。れ。ん。や。頼。り。も。然。も。あ。り。逸。く。縛。り。て。曳。り。て。ゆ。く。と。各。の。小。得。物。を。ち。揮。て。競。ひ。鬼。れ。ば。い。と。擧。げ。て。名。者。も。卒。雨。を。せ。と。你。達。も。粗。少。知。る。ぬ。ん。朝。夷。大。人。の。信。義。の。士。も。故。り。夫。等。の。人。と。殺。し。て。の。地。を。退。く。と。做。さん。と。小。仔。細。の。み。ら。ら。ど。や。你。達。精。を。き。款。を。あ。ら。も。任。意。守。護。眼。代。の。下。知。め。い。あ。り。と。も。罪。も。多。く。途。行。人。と。擧。げ。る。鳥。詩。あ。る。も。限。り。あ。り。其。外。除。て。通。さ。る。か。ら。い。と。も。猶。立。塞。ぎ。通。さ。と。い。は。れ。是。非。も。う。吾。等。と。も。一。個。の。杜。夫。と。阿。容。と。と。你。

達小柄めらして曳まんや。元来仇も憾ももろき。你達と死と争とふも。益
 とするて絶てり。勢ひの自然に因て。銘の才と過つ心ある人の多き所悟
 道と閑けより。と絆と好むの心なけり。面と和らげ説らるる。農夫們
 の入る心。噪き立る僻ゆく。中も年着き者ども。そららの言葉と耳も
 けを賢そふいひ遁まて。避んとするとも。道きんや。兎角の言と費さん。打
 倒して搦めよと。愈一容小のひ言と。矢庭お打てかるゆ。這い少釈り去未然
 ら。逸て汝等が首切並道と閑きと通りんの。者共準備と後方小控へし。
 属下のり不言なぐ。猛八其処へ踊りおると。獸六郎の隔限もわらぬ
 彼大勢か。もろく如何も猛くとも。愈切拂ひて通りんと。なぐ小及びびぐも。
 且屠下小過あらん。若ト今言葉と喝し。宥めてとて通りん小。とり小間も
 あら農夫們既小間近く進まより。打倒さんと失めく不ふ。言葉と以て悦

術も。猛八の腰も二刀。抜ももんせ先小進み。漢士の小鬚と下と破る破驚
 切らりと。言とまろく。狂ひ廻る。迹小続き。数多の人の。嘈こり。声小。一途の
 何せまどむてかる。獸六郎も属下の者も。這い大事小及びびり。斯るる人。各
 小腰の刀と引ぬき。群ぐる中へ割て入。誰と敵とも定めり。滅多お小薙ぎ
 まつ。深痺と負ひあはまども。或ひ肩先腕首。研きつ。つと疵とらけ。
 恐まを退く。のりもあり。まこ此容小も見懲せだ。まこ引捉へて。柄おせん。と
 蒐まらるものあり。得物で刀とらけ。雷つ。まこ竹槍とさう伸て。突かるて。いと
 急るり。さ小於く猛八及獸六郎とと。豫ての練小。渾才と傷る。ま無れど。
 遺る者。腕の力いあれど。試合小。馴まど。或ひ肩先。突破らして。痛小
 弱。其処へ平張りのあり。農夫們。勇。おて蒐る。その威勢。侮り。が
 んえけ。猛八。小飛鳥の如く。翔り。巡る。倚来る。のり。研倒ま。五人可。

獸六郎もあど先途と脅力と究めて切立威勢將小奮然え農夫們的
 辟易と。霎時後方へ引下。田に聊解さし。而個も息あつと吻き。傍と祝
 する。徒がひ。甲乙あめく深瘡を負て。而三人と死せり。斯くこれの特
 ころ。去来今一敷目小物なせ。遂と窺ひあ場の場と去らん。渠等不便の景
 勢多と。是と救ふの暇も。後小と再詮方あめ。続さると猛八がんかへ
 不と獸六郎も心海と属添めて。去らん早むる足元農夫們はそれ
 遁す。とまて群と押取撲と猛八顔と小研拂。大刀風小大く逆傍得間
 と候ひ一町斗。走る向ひま。二旗。と捕へと荒々の人数競ひかへ
 ととも。進へ入ると先小なる。而三個小傷つ。是と以と飛返巡
 中と向け。海とや志と。獸六郎も諸共。大刀とら揮。是れ。威と
 あとと馳通。有斯と。右の方。川小副。二旗の。人馬逆。突と。而個

と作きて。是と。この。這の。農夫の。体あ。真先。小幟と。そ。人数。九四五
 十人。その。跡。の。弓矢。鋒。と。携え。る。の。二三十人。頭。あ。わ。ん。騎馬。二人。の
 餘の。雜人。此。彼。合。せ。て。百人。可。と。と。え。ぬ。が。土煙。り。と。ま。て。馳。来。る。是。れ
 尙。小。農夫。等。が。ま。る。所。の。守護。眼。代。と。言。あ。り。い。の。と。あ。る。ん。先。刻。より。戦
 へ。ひ。勞。と。咽。乾。け。と。湯。水。と。海。を。腹。空。け。と。と。飯。と。啖。ひ。ん。不。と。く。筋
 力。弱。と。と。と。心。む。り。の。早。と。も。あ。の。大。敵。小。あ。ら。ん。や。然。と。い。く。と。不。憶。も。兵
 書。小。所。謂。重。地。小。入。て。如何。と。も。詮。方。有。が。勢。近。く。傍。あ。ら。ん。吾。等。一。切。辨
 せ。ぬ。う。と。の。ひ。解。と。赦。さ。さ。ん。あ。安。撫。小。退。べ。し。倘。と。と。あ。く。も。赦。さ。と。あ。ら。ん。
 命。と。限。小。戦。之。あ。終。り。と。取。ん。の。足。下。い。い。ふ。思。ひ。ふ。と。猛。八。い。ま。と。更。小。
 覚。悟。究。め。一。景。勢。か。あ。て。泰。然。と。て。い。ひ。け。ば。獸。六。郎。い。ま。あ。の。貴。所。の。言。葉。
 勇。ま。く。勇。士。誰。も。斯。と。あ。め。然。と。と。在。下。が。思。ふ。あ。の。所。謂。且。の。死。と。控

朝夷小會合
猛獸六郎因ら
び



んで生と護るの難き成忘るへ計畧ささふ似たり。いふ所の小吾も此処へ来
 朝夷大人の危急と告てその機ふらふ。臂と援けん為のさう。然るに
 親くそのこと。さざとひども既小多あり。懸城以下と斬害して。退まらば
 災厄の大ありのあり。大人の命全きや否とのまご知ざる。敢て吾もさふ
 死さば。是俗ありの豹死あり。自他の益さふあり。敵と野徑小棄るの忠心ふ
 あらむ。我もあむ。美と大丈夫の所為と言ふ。艱難と嘗辛苦と凌ぎて
 一旦の志と。まんとこと。原心は欲けけ。然るに。斯の如く。困と吾と攻
 不至まらば。いふあり。通まん術と討の外のあり。時と黄昏小及ぬれば。
 まづこの河も小茂とめらる。芦茅の中小牙と潜め。人の数と遣過。動静と
 量とて通まん。難きとやいふ。備と其処小あり。曉りて千種と搔分て。
 索ぬるあり。徐と。岸も小臻。時宜ふあり。緯急さる。水中へ潜り入て。

身と通まん。貴兄いふ思ひ。いふ。猛八あり。農夫們と討つて
 あらふ。死るん血の勇。いふ。自他の益あり。然らば。人数の近づぬ間。先
 片陰へ隠さんと。弥さうふ茂と。河もこの若と搔分て。潜り入ると二十歩
 たり。斯て敵の来るとも争う人の在るとも。這い屈竟の隠処あり。と身
 と屈めて候ふ。間ふ。えやかの二旗近づき。獸六郎の頭と擧て。若の茂と
 本道間より。その行装と。呪ふ。這い思ひ。や騎馬あり。朝夷も秀ありん
 と。いふ。於て言葉遠あり。猛八あり。示。去来と往て對面せん。いひ。草と
 左右小分け。急ぎまむんと。做けり。この隊の人との物音小敵とや思ひ
 と。さふけん。絆と。むけ弓把連。倍と叢と白眼て。人の物と。まづ景勢ふ
 獸六郎いと揚て。各々。を麻忽あり。吾も害心ある。のら。朝夷大
 人小見参せん。裁子の苦根と。きり。のら。先隊の雜人。耳も。

世より酷吏として人虎の如く怖き。蠅のごとく陋みむれば。その風聞小
 疑ひあじ。年未我意不募らる。民と虐げ財宝と貪り。その報ひ嗟
 快きとあり。雀躍りて飲ぶのみ。虎狼も驚く。そのもろなる録倉の官
 人あり。そまこと殺して朝夷大人が始終安穩なるべきや。夫を圖りて
 若縛あふ彼人と守護とをその必異と計らむ。思と知ぬ所為る。人知
 まど此処不居りて大人と俟りけり。然まとも當時の人情信実なるも
 心の弛き開い過分なる心を然あふ。汝達案内とせよ。先不立して道と急
 らる。渠多が親族逐来。昨夜の強動早くも。和沢の守護知縣を
 朝夷大人と討單んと農夫們と驅催し。山を超て押あつ。その風少頻る
 され道と引ちりて。必羽の百次へ赴き。人然らむ。大事不及むと告る。の
 猶信せ。先との所不足と注めて。女時世間の動静と探る。その所疑ひ

あり。あふ於ては族が信実なる。知る。然し。是より必羽へ越る。路は
 難所多。嶺と攀溪と渡る。最悪獸多。不慮の備へとせずんば
 あふ。と弓矢陣を携へ。未つ。將山霧の深さ。及び目標を。核ひか
 一。幟とさへ不準備。其処。ちち急ぐとす。秋の日影の短く。て。もや
 暮不及び。そ。汝が。未。所謂。い。氣遣。と。向。腰越獸六郎
 の荒河の渡口。宿。時。是。始末。落。物。猛。引合す。れ。び。
 朝夷馬より跳下。備。足下。及。岡田の冠者。遺腹。剛。若。刀。称。あ。ひ。
 一。不運。て。民間。陥。一。縁故。這。回。在。下。遭。ん。と。遙。この地。来。ま。
 せ。り。不憶。も。大雅。逢。ひ。一。今。具。獸。六郎。より。美。好意。謝。す。
 小所。加。梅。其。夜。の。旅。人。齋。密。書。不。圖。足。下。入。と。う。それ。小
 就。種。の。思。ひ。當。と。り。斯。有。早。く。祝。ま。欲。け。と。時。取。の。急

勢ふあはれ。日中の程より飲食と断とあまの勞まのらん侍ひ今宵山越の。準備の齋を割箸あり。是をて飢と凌ぎり。早せ櫃より把却共え思ふ。今日宵闇あり。路の程え覚束まふ且此処を休息る。足下等が話説も安へく。まこのめも多あり。去来者も河をこ生る。苦を断て圓座ふるせ。まこ樹の枝と伐卸して火と焚よと示。以上その員百人可と思ひかりひ小田居して割箸と閑くありのあり。朝夷猛八獸六郎の三個の中央の坐とあて。頓て過去行末の物語とを始りける。畢竟あふ會合して後を顛未いろいろん。癖長けま編と嗣巻と換て解んの。拙著と陋あるものぞしく。尊賢と愿ふのあり

村田

村田

朝夷巡島記全傳第七編卷之五 終

朝夷巡島記全傳

曲亭主人著 柳齋豊廣畫 卅冊

同 第七編

松亭金水著 葛飾為齋畫 五冊

同 第八編

今近刻出来 五冊

彫工師

京都 井上治兵衛 浪華 中澤太助

攝府書肆 河内屋太助

嘉永八乙卯歲春吉川八

江戸日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛

江戸大傳馬町三丁目 丁子屋平兵衛

江戸日本橋通貳丁目 須原屋新兵衛

全馬喰町二丁目 菊屋幸三郎

京三條通御幸町角 吉野屋仁兵衛

大阪南本町心母橋通 河内屋平七

全北久室寺町 河内屋源七郎

全唐物町 河内屋太助

書

肆

發行

書肆

江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛

同二丁目 山城屋佐兵衛

同二丁目 須原屋新兵衛

同芝神明前 岡田屋嘉七

同芝神明前 和泉屋吉兵衛

同兩國横山町壹丁目 出雲寺萬治郎

同淺草茅町二丁目 須原屋伊八

大坂心齋橋通北久寶寺町 河内屋源七郎板

